Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-26

国際文化学部「日本語コミュニケーション」クラスでの実践と課題

河野, 美抄子

(Citation)
神戸大学留学生センター紀要,20:75-93

(Issue Date)
2014-03

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81005488

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81005488

KOBE UNIVERSITY

神戸大学
留学生センター紀要　20：75 ～ 93，2014

国際文化学部「日本語コミュニケーション」クラスでの実践と課題

河野美抄子

キーワード：留学生、グループ活動、会話能力向上

1　「日本語コミュニケーション」クラスの概要

2006年から国際文化学部の「日本語コミュニケーション」クラスを担当している。このクラスは留学生と日本人学生とが共に日本語を学ぶ場で、後期の半年間だけ開講している。このクラスでは「日本語コミュニケーション」という科目名にふさわしくなるよう、主に留学生の口頭表現能力を高めるための練習を行っている。

表１は年度別の履修登録した学生数のその内訳と割合である。留学生は国際文化学部の学部留学生、交換留学生が中心であるが、他学部の学部留学生、留学生センター所属の日本語・日本文化研究留学生も参加できる。平均的な日本語能力は上級レベルであるが、交換留学生の中には初中級レベルの学生も見られる。たまに大学院生や研究生の参加もあるが、途中で脱落する傾向がある。日本人学生に関しても他学部生の履修が認められており、経済学部、経営学部、発達科学部の学生の登録がある。初年度は発達科学部の学生一人だけの参加であったが、その後、日本人学生の登録者数は増え、逆に留学生が少ない年が続いた。2008年度に急に日本人学生の登録が増え､留学生ではなく日本人学生のための授業展開にせざるを得なくなり、教務と相談の上、２年生以上の日本人学生が参加しにくい時間に設定し直し、なおかつ､「30人以上は抽選」という文言をシラバスに加え、日本人学生の登録者を制限するようにした。この効果か、2009年以降は国際文化学部の１年生が中心に登録するようになり、2010年からは留学生も増え、日本人学生とのバランスが取れるようになってきた。

表１　年度別登録学生数のその内訳と割合

開講年度	登録者総数	留学生数	日本人学生数 （内他学部生数）	全体に対する 留学生の割合
2006年	15	14	1（1）	93.3%
2007年	35	15	20（3）	42.8%
2008年	58	5	53（9）	8.6%
2009年	37	5	32（5）	13.5%
2010年	40	17	23（12）	42.5%
2011年	52	19	33（3）	36.5%
2012年	63	28	35（5）	44.4%

年度の初回には、このクラスでの目的が留学生の口頭表現能力の向上にあること、それゆえ授業の活動の中心は留学生であること、日本人学生は留学生の日本語によるコミュニケーション活動をサポートする役割であることを説明している。活動の内容は自己紹介、インタビュー、グループディスカッション、プレゼンテーション、ロールプレイ、スピーチといった話すことに重きを置き、さまざまなテーマでの会話や発表を行ってきた。

2006年度は日本人学生が少なかったため、リサーチ、インタビューを外で行うこともしたが、2007年度以降は主に教室のみでの活動としている。留学生にできるだけ多くの人と触れ合う機会を作るため、固定したグループでの活動とはせず、グループワークの都度、出席している留学生の数と日本人学生とのバランスを考慮しながら新たなグループを形成して行っている。活動のフィードバックは2010年度まではブログ（同年閉鎖）上で、2011年以降は翌週配布するプリント等で必ず行っている。

このクラスに参加する動機については2013年の調査[1)]によると、留学生は14人中８人が「日本人と話したい」、５人が「日本語の会話力を高めたい」で、学習したい項目として「自然な会話」や「日常会話」を５人が挙げていた。日本人学生は40人中29人が「留学生と友達になりたい、交流したい」を動機とし、９人が「会話力、コミュニケーション能力を上げたい」と書いていた。学びたいこととしては「日本語の難しさ」「留学生にとっての日本語の難しさ」が合わせて12人であり、日本語教育に関わる興味関心もあることがうかがえる。この意識傾向は担当し始めたときからさほど変わらないように思う。

2 「日本語コミュニケーション」で扱った活動

年度によって留学生の日本語能力やニーズが異なるため、活動のテーマや内容も少しずつ変えている。クラスではロールプレイやインタビューなどのコミュニカティブ･アプローチで扱うアクティビティを利用し、１回で完結するように、また、年度の初めにはコミュニケーションをスムーズにするための活動を、後半には日本語力を高めるための活動を中心に配置している。活動の種類としては、自己紹介やインタビューのように、ペアで行うもの、ディスカッションやディベートのようにグループで意見交換を行うもの、敬語や関西弁のように講義をした上で運用を練習するもの、リサーチなどプロジェクトワーク的にグループ活動するものと、大きく分けて４つのパターンがある。発表の形式は、インタビュー、スピーチ・プレゼンテーション､ペアあるいはグループによるロールプレイやスキット､記述の４パターンで行っている。特に記述したものについては次回のクラスでプリント等でその内容を共有してフィードバックすることを重視している。

表２は今まで行った活動をタイプ別に表したものである。「リクエストテーマ」とあるものは、その年度の学生からディスカッションのテーマを募ったもので､「小学校から英語教育は必要か」や「草食系男子について」「就職」などについて話し合った。「社会問題」は指導者側が用意したテーマで、「電車内のマナー」「カジノ誘致の是非」などその時に話題になっているものを取り上げている。

2012年度に実施したアンケートによると、「このクラスで期待していたことが勉強できたか」という質問に対して、37人中「はい」が22人､「まあまあ」が11人と、学習内容については概ね満足できているようだ。扱った項目の中で複数回答により半数以上が「よかった」としたものは「関西弁（27人）」「ディスカッション―移民を受け入れるべきか（19人）」（社会問題）「留学生が来たくなるキャッチフレーズ（16人）」「インタビュー（15人）」（他己紹介）「冬休みツアー企画（15人）」であった。本項ではこれらの中からいくつかを紹介する。

表２　クラス活動の種類と発表の形式

発表の形式／活動の種類	インタビュー	ロールプレイ スキット	プレゼンテーション スピーチ	記述
ペアワーク	自己紹介 他己紹介	初対面 非日常場面 「頼む」等の機能		
ディスカッション（協力型）		キャッチフレーズ クレーマー対策 商品開発	ツアー企画 見学コース 商品開発	
ディスカッション（討議型）・ディベート			社会問題 リクエストテーマ	社会問題 リクエストテーマ
講義＋運用練習	敬語	敬語 オノマトペ 関西弁 キャラ語		
グループワーク			読み・伝える リサーチ	リサーチ

２．１　自己紹介

定型文による自己紹介ではなく、相手に印象付けるエピソードなどを盛り込んだ自己紹介をする活動。「自己紹介をしてください」というと、留学生でも日本人でも、名前や学年、学部など客観的な事実のみを話すことが多く、付け加えたとしても、趣味などで「○○が好きです」程度の内容しかない。そこで、「覚えてもらう」ことを意識した、印象に残るエピソードを付け加えることを提案している。初回の活動で皆緊張しているため、それをほぐす意味で「ほめ合い」の活動も併せて行う。「相手を気持ちよくさせることで、あなたの印象が良くなるのだ」と説明して、髪型や持ち物などを「かっこいい」「かわいい」を使わないでほめることを練習し、ペアで自己紹介をし合う活動につなげる。

このクラスには異なる国籍、学部、学年の学生が集まっているので、今後の活動に向けて、クラスの構成員を知ることも狙いであるが、活動に参加することが最重要であることを出席者に理解させる意味もある。全体での学習とペア学習を行い、時間に余裕がある場合は、「インタビュー」を行う。この活動は次週の布石である。

2．2　インタビュー

日本人学生が留学生を「公開インタビュー」する活動で、主に2週目に実施している。3週目以降のグループワークに入ってからは個人的な情報をやりとりする時間が取れなくなるため、一人一人の留学生のことを皆に知ってもらう機会にしている。初回の「自己紹介」では触れられなかったエピソードを引き出すことを目標としていて、話の内容も重要なのであるが、実はこれは指導担当者にとっては留学生の日本語能力チェックの機会でもある。

「エピソードを引き出すインタビュー」は一つの質問に対して、1度の回答で終わらせるのではなく、「回答から質問を作り出す」ことの繰り返しによって完遂できる。実際のところ、皆の前に引っ張り出された学生が上手くできることは滅多になく、間を置かず質問することで精いっぱいで、「何が好きですか」「夏休みにはどこへ行きましたか」といった質問を重ねるだけに留まる。そこでOPI[2)]のインタビューのように、答えから何かを説明させるような質問、または単語や簡単な文ではなく、談話レベルで答えなければならない質問をするように指示する。エピソードを語らせるためには「何をしましたか」より「何か面白いことがありましたか」と質問すること、「好きな食べ物は何ですか」から「それを初めて食べたのはどのような状況でしたか」と展開させることなどを説明する。このような活動を通して指導者は留学生らのおおよその日本語能力を確認することができ、また、日本人学生らはインタビューの技法も学べる。

2．3　リサーチ

2006年のリサーチでは、「旅行」「ニート・フリーター」「就職」をテーマに、学生食堂で日本人学生にインタビューをして、結果を報告するグループワークを数回行った。この活動はほぼ学生の自主に任せて進めた。アンケートそのものは簡単なものであったが、学生らは積極的にデータをとり、しっかり分析し、レポートにまとめていた。資料も自分たちで探してグラフにしている班もあった。学生らが作成した報告書は資料1を参照されたい。

2．4　グループディスカッション

2007年度以降行っているグループディスカッションでは、①「皆でひとつのものを作り上げる」タスク、②「情報交換や意見交換する」タスク、③「賛成か反対かを議論する」タスクの3タイプを実施している。①では「キャッチコピー」「商品

開発」「ツアー企画」などをテーマにし、協力して案をまとめる。②では「草食系男子」「制服」「大学生の科目」といった比較的身近なテーマで文化的な相違やさまざまな考え方を知る。③では「死刑制度」や「中絶」といった社会的な問題について意見を述べることが目的となる。これらの活動の中で日本人学生は①や②の活動を高く評価するのに対し、留学生は③の活動を好むようで、事後に「もっとやりたい」とのコメントがよく見られた。

２．４．１　一つのものを作り上げるタスクの例

この「一つのものを作り上げる」ためのディスカッションは、就職活動の資料[3)]からヒントを得たものである。入社試験の一環にグループ活動をさせてその様子を見るというのがある。社会や仕事に対する意識を問うもの、マーケティング知識や創造性を問うものなど、その企業や部署に合ったテーマで話し合いをさせ、協調性やリーダーシップ、発想力などを見るための活動として行われている。その中にこのタイプのディスカッションが紹介されていた。ここでは、個々の能力を測る必要はないが、グループ活動としては達成感がありそうなのでテーマをアレンジして取り入れたところ、学生らの反応は非常に良かった。

「神戸大の見どころ、食べどころ」（2011年度に実施）

設定：

ある国の大学と新しく交換留学の協定が結ばれるようです。話し合いのために来日されたスタッフ数人を神戸大学のすばらしさがわかるところに案内してください。見学の時間帯は午前11～午後１時の２時間です。昼ご飯（相手の事情は無視）もそのツアーにく組んでください。

ディスカッションの流れ：

自己紹介→役割分担（司会、記録、時間管理、発表etc.）→発想を広げるための意見交換→論点を絞り込むための意見交換→コースの決定→発表（コースは板書し、どのような意見があったか、どうしてそのコースになったか、そのコースの売りは何か、などを口頭で発表）

この回ではグループで話し合うことに重点を置いていた。このような活動の際、最初は戸惑いが見られるものの、自然発生的にリーダーが生まれ、役割分担がなされていく。沈黙が続いていれば介入して、問題解決をしていくが、たいてい何もしなくても笑い声があちこちで起きてくる、和やかな雰囲気である。この回でも留学生は自分の意見をよく述べていて、それらが案に取り入れられていたようだ。一人

の留学生が好きな「かつ丼」を食事のメニューにする班もあった。

それぞれの班の発表に対して各人のコメントを採集した。この回では発表方法について特に指示や注意はしなかったが、原稿を読んでいる班と読まずに発表している班との両方を見ることで、プレゼンテーションの方法にも気づきがあり、声の大きさ以外にアイコンタクトの重要性を指摘する声が少なからずあった。それぞれの班が考えたコースと学生らのコメントは資料２を参照されたい。

２．４．２　社会問題について議論するタスクの例

このタスクは2012年度に実施した。日本語・日本文化研究留学生や学部留学生のために企画したテーマだったが、普段、日本人学生と議論する機会がないせいか、交換留学生にも好評であった。この回では意見を述べるための表現を身に付けることを目標とした。身近ではない話題について、論理的に意見を述べる場合、どのようなことばを使い、どのような文型で話すべきかを考えるための活動である。今回は討論のテーマにA：日本は核を持つべきか、B：日本は移民を受け入れるべきか、の二つを用意した。これは使用する日本語のレベルをAは上級向け、Bを中上級向けとして、留学生の日本語能力に対応できるようにしたものである。

このタイプのディスカッションにはある程度予備知識が必要になるため、前週にテーマを予告し、AかBかを選択、その問題について調べておくことを宿題にした。当日はテーマ別に５～６人のグループを組み、その問題について討議し、グループの代表者二名がそれぞれ賛成意見と反対意見をまとめて発表。たいていのグループ代表は留学生が担い、口頭発表をした。彼らの積極性がうかがえる。最後に留学生は個人的な意見と感想を、日本人学生は意見を述べるために使用した表現の例を紙に書いて提出させた。留学生には「意見を述べる」という機能の復習のため、日本人学生には「日本語教育的視点を養う」ためである。まとめは資料３を参照されたい。

２．５　ロールプレイ

日常的な会話能力を向上させたい、自然な会話を身につけたいという留学生が多く、さまざまな場面での会話練習する必要があるため、ロールプレイはほとんどの年度で実施している。ロールカードを準備し、中級レベルから超級レベルまでのタスクを留学生の日本語能力に合わせて課する。「初対面＋依頼」をテーマにした例を挙げれば、中級では「あなたは旅行先の食堂に入りました。メニューを見ても、

どんなものかよくわかりません。隣のテーブルの人に助けてもらってください」、上級では「あなたは写真家です。街を歩いていると、今度の作品のイメージにぴったりの人を見つけました。その人にモデルになってほしいと話してください。断られても、ほめて、その気にさせてください」というようなタスクである。中級では日常的な語彙を用いて、やや丁寧に依頼できればよいもの、上級では非日常の場面で、少し高度な表現を要求するものを設定している。敬語をテーマにしたものの例では「あなたはジャーナリストです。有名なスポーツ選手にインタビューしてください（中級）」、「あなたはキャビンアテンダントです。迷惑な客に注意をして、他の乗客に不快な思いをさせないようにしてください（上級）」などのカードを作成した。

このようなタスクを、練習なしに留学生と日本人学生の二人を前に出して行う場合と、ペアあるいはグループ学習をしたのち、二人で演じる場合がある。中でも敬語を必要とするものや「関西弁」を扱う回では、留学生らが適切な表現がわからないことが多いため、全体学習の後、グループ学習で日本人学生の指導を受けた上での発表としている。

２．６　プレゼンテーション

「伝える力」を養成するための活動である。説得力のある話し方とはどういうものかを説明し、声の大きさだけでなく、アイコンタクトや表情にも注意するように指導している。

プレゼンテーションの前にはグループディスカッションも行うことになるが、この回ではプレゼンテーション方法をよく検討し、発表に生かすように指示した。内容そのものより、好感を得て印象付ける話し方を練習することが目的であることを伝えた。

2010年度では「ダイエット関連商品をPRする」タスクを実施した。手順は以下の通り。

①　グループで新しい商品について考え、その特徴をいくつか出す。（運動器具、薬品、食品など、どの分野でも構わない）

②　売るためには、何を強調すれば良いかを考えて、「売り」を絞る。（聞き手が共感することは何かについても考える。）

③　売るためには、どのような方法で紹介すれば良いかを考える。（一人で話すか、ペアか、スキットなども入れるか）

④　トークの方法、話し方や視線の動かし方を練習する。（声の出し方、アイコンタクトは重要）
⑤　発表
短時間の話し合いで、それぞれの班が工夫を凝らした発表を行った。発表を聞いている学生からは「売りが協調されていたか」「話し方に説得力があったか」「アイコンタクトはとれていたか」の三点に対する評価とコメントを採集し、次回で復習した。評価・コメントについては資料4を参照されたい。

3　課題

このクラスは演習型の授業であるため、教師主導の方法ではなく、学習者中心の活動にする必要がある。そしてできるだけ多くの学生に発話の機会を与えようとするとグループ活動が最も効率的である。その上でこのクラスの大きな問題点は、留学生と日本人学生の人数とバランスが一定しないことである。クラス活動のやりやすさから言えば、比率は１：１から１：２までが望ましいが、思うように登録があるわけではない。しかも実際のグループ活動においては登録者の数ではなく出席者の数のバランスが問題になるので、調整は難しい。オリエンテーションの都合か、初回に留学生が一人もいないこともあれば、研修旅行などで突然半数ほどの留学生が欠席する日もあり、シラバスどおりに進められない場合も少なくない。グループ活動がやりにくい時には全体に対して講義しながら、数組のペアワークを皆の前で行うという活動に変更したり、あるいはグループを固定しないで、時間を定め学生を移動させるというような工夫でこの問題を乗り切っている。

もう一つの問題点は評価である。留学生の目的は第１項で述べたように「日本人と話したい」「日本語の会話力を高めたい」というものが大半である。日本人学生では「留学生と交流したい」が圧倒的多数であり、このような目的に対する評価をつけることは困難である。留学生の会話力が高められたかどうかを確認するためには、学期の最初と最後に会話テストをするべきであるが、すでに上級レベルの学生が半期のうちに、しかも週に１コマの授業で目覚ましく進歩することは望めず、テストに意味があるとは思えない。また、日本人学生の中には「コミュニケーション能力を身につけたい」「日本語や日本語教育に興味がある」「文化の違いを知りたい」といった目的も見られる。このことについては、「（活動が）楽しかった」で終わらぬよう、毎回のフィードバックにより、何を学ぶことが目的であったのかを確認させ、それは達成されたのか、どんな学びがあったかについて内省を促しているが、

これも評価の対象とすることは難しい。「新たな学び」の有無や程度をどうやって測ればよいのだろうか。

実際のところ、年度末に個人で行うプレゼンテーションあるいはスピーチによる評価のほか、平常の教室内の活動において、留学生については「どのくらい積極的に話したか」、日本人学生にはそれに加えて日本語教育的視点で「どのくらい留学生に対して協力的であったか」も判断基準にしている。しかし、これらは主観的評価でしかない。客観的な評価基準としては出席率のみである。発表時に聴いている側に評価コメントを書かせることもあるが、それを数値化したとしても公平な評価とするには疑問がある。このような授業の評価は到達度を測るものではなく、「話す活動」という「過程」を評価しなければならないため、公平な評価のための客観的な指標をどのように取り入れるか、今後考えていく必要があると考える。

注

1）調査紙による調査。自由記述式。「どうしてこのクラスを取りましたか」「このクラスで勉強したいことは何ですか」「ディスカッションするならどんなテーマで話し合いたいですか」の三項目について質問した。

2）OPIとはOral Proficiency Interviews の略称で、米国のACTFLという機関が設置した外国語能力基準に則してインタビューにより会話能力を測定する評価法のことである。評価のためのインタビューをするので、インタビュー技術が求められる。

3）webの就活応援サイトに「グループディスカッション」に関する記事が豊富にある。その中に以下のファイルのようにディスカッションのテーマを紹介しているところがある。http://www.mensetsukan.net/practice/pdf/gd01.pdf

参考文献

岡崎敏雄・岡崎眸著　1990年『日本語教育におけるコミュニカティブ・アプローチ』凡人社

牧野誠一他著2001年『ACTFL - OPI入門―日本語学習者の「話す力」を客観的に測る』アルク

資料1　リサーチ　「旅行」(2006年11月15日に発表した調査データ)

１．イントロダクション

海外旅行について調査を行っていました。20人の訪問者のうち、以下の結果が出ました。

性別　　男　１３人　　女　７人

年齢別　　10代－１３人　　20代－２人　　30代－０人　　40代- ３人

海外旅行経験別　　ある－９人　　ない－１１人

サンプル合計：２０人

２．調査結果

８番の質問について：

(海外旅行経験あり)

英語圏へ行きたい人－４人・・・外国語は英語しか喋れない（コミュニケーションがある程度取れる）

どちらでもいい人－３人・・・　どこでも英語が通じる

英語圏以外がいい人－２人・・・さまざまな文化に触れてみたい

(海外旅行経験なし)

英語圏へ行きたい人－９人・・・コミュニケーションがある程度取れる（英語の勉強になる/今まで英語しか勉強したことない）

どちらでもいい人－１人・・・　どこでもいいから、とにかく海外行きたい

英語圏以外がいい人－１人・・・どこでも英語が通じる

９番の質問について：

(海外旅行経験あり)

移住したい－２人・・・日本より住みやすい国がある

移住したくない－７人・・・日本大好き／日本が一番住みやすい／言語の壁／もうウンザリ

移住したい－１人・・・のんびりできそう

移住したくない－１０人・・・日本がいい／移住の苦労／ずっと英語で喋らなければならない

３．結果分析

８番目の質問：英語圏、どっちでも、英語圏以外

海外旅行経験のない人たちの中では、ほとんどみなさんが英語圏の方に行きたいそうです。原因はもちろん簡単に分かります。大体日本人のみなさんは就学中にいろいろ英語を勉強しましたから、英語でのコミュニケーションや通信ができるはずです。英語ではなかったら、不安になるでしょう。

一方、海外旅行経験のある人々の場合は、意見が分かれています。その人たちには、もう外国へ行ったことあるから、カルチャーショックの恐れは弱いと考えられます。

そして、英語圏以外の国に行きたい人たちは、きっと、違う国や違う環境の経験をしたい人たちだと思います。(さまざまな文化を触れてみたい、英語がどこでも通じる)

９番目の質問：
海外旅行経験あってもなくても、多くの人が移住したくないと答えたのですが、それはおもしろい面だと思います。他の国に比べると、日本人の若者は自分が住んでいる国について、かなりの程度まで好きだそうです。それには、主な理由が二つあると思います。一つ目の理由は、自分の国に対しての尊敬。ヨーロッパの国々では、若い人たちでも、国の多くの民でも自分の国について話しているときに、「嫌い」とか、「もうあきあきしてる」とか、こんな感じがよく出てきます。でも日本では、調査の結果を見ると、《young people seem to be aware that their country brings them a nice life in a complex society, even if everything is not perfect in it》.
そして、最後の理由：日本は、本当に、実際に住みやすい国だと考えられます。
４．考察とまとめ
＊ほとんどの人が英語圏の国への海外旅行を希望している。理由として、「英語しか話せない」が挙げられる。一方、英語圏以外の国への海外旅行希望者は、「色々な文化を見てみたい」、「英語は今やどこでも通じるなど」の理由が主だった。

＊海外旅行に一度でも行ったことがある人は一度も行ったことがない人に比べ、英語圏以外に行きたい人の割合が高い。海外渡航経験者は一度海外に行った経験から自信がつき、英語が通じない英語圏以外の国でも大丈夫と考える人が多いと考えられる。
＊ほとんどの人が海外に移住したいかという質問に対し、「したくない」と答えた。理由は「日本が好き」という意見が大半を占めた。
＊海外旅行に一度でも行ったことがある人は一度も行ったことがない人に比べ、移住したいと考える人の割合が少し高い。特にホームステイなどの経験がある人は海外での実際の生活を体験しているため、移住したいと考えるようだ。
調査の結果より
以上のことから、人々は一度海外に行くと視野が広がり、自信もつき、より積極的に海外へ行こうと考える人が増えると考えられる。ただ、住む場所としては文化や言葉の壁から、住み慣れた日本を気に入っている人がほとんどであるといえる。
今後、海外旅行や留学がますます増えるに従って、より多くの人が国際的視野を持つであろう。
それに伴い、より積極的な意見が出てくることも予想される。例えば、移住したい、ロングステイをしてみたいなどの意見の増加だ。一方で、海外旅行経験から他の国との対比により、日本の良さ、日本文化のおもしろさを改めて発見することもあるだろう。
　今回の調査で、海外旅行への憧れと、同時に日本への愛着の両方を、皆が持っていることが明らかになった。今後もその両方をバランスよく保ってゆくことが大切であるといえる。

資料２　グループディスカッション「神戸大の見どころ、食べどころ」

各班の発表内容、①はよかった点、②改善するべき点についての学生らのコメント

１.六甲台（図書館･講堂）→ＩＣカフェ→生協→（うりぼーロード）→LANS BOX（ラーメン）→百年記念館

①・最初にコース全体の説明をしてから、くわしく説明というのがわかりやすい
・神大Ｔシャツなど神大のおみやげ
・留学生の視点
②・声が小さかった
・時間配分がよくわからなかった
・ＩＣカフェは景色がきれいではない

２.六甲台正門→（授業見学）→レストランさくら（昼食）→馬術部→（うりぼーロード）→留学生センター

①・留学生とのアクティビティ
・ホワイトボードの利用
・馬や海事科学部など（海事科学部まで見学に行けないので昼休みに紹介する）
②・ほとんど一人で説明していた
・難しい日本語があった
・ホワイトボードをもっと上手に使えばよかった

３.六甲台正門→図書館→レストランさくら（昼食）→ＩＣカフェ→（うりぼーロード）→百年記念館

①・サークル（ガーナガーナなど）の協力（昼食時の利用）
・移動中にも説明する
・全員で発表。笑顔！
②・話し方が少し早かった
・ひとつひとつの場所の説明が足りない
・全員は多い

４．留学生センター→百年記念館→LANS BOX（ほっかる弁当）→（温室）→六甲台

①・自然の中で、ほっかる弁当を食べる
・留学生センターで先生や留学生と交流する
・わかりやすい日本語で、ツアーをしているようだった
②・ほかの大学と違うところが強調されなかった
・留学生センターから六甲台への上り坂がきつい
・行くところが少ない

５．発達科学部Ａ棟６Ｆ→六甲台第一学舎→レストランさくら→図書館→百年記念館→茶室

①・景色というテーマを示した
・記念撮影と茶室でお茶
・全員で発表

②・留学生にとって難しいことばがあった
・ツアーは時間的にきびしそう
・「話す」のではなく「読んで」いた
6．留学生センター→正門→六甲台の建物（文化祭）→図書館→バイク駐車場→馬術部→サークルＢＯＸ、テニスコートなど→国文の食堂（かつ丼）
①・文化祭
・馬術部やクラブ活動、バイクを見ること（神大は「バイク通学日本一」）
・留学生が中心になって発表していた
②・時間がわからない
・たくさん歩かなければならない
7．発達科学部のバイキング学食（昼食）→図書館→講堂→レストランさくら（景色のみ）→（サークルＢＯＸ）→ＩＣカフェ→食堂（クレープ食べ歩き）→百年記念館→（国維寮）
①・最後の締めくくりがよかった
・バイキング昼食、中華料理、クレープ
・自己紹介していた
②・時間的にきびしそう
・レストランさくらで景色を見る？
・理由の説明が少し短かった

資料３　「グループディスカッションの復習」
［日本は移民を受け入れるべきか］
賛成意見（留学生より）
・企業などのビジネスは、移民を受け入れることによって会社を成長させることができると思う。他の会社の戦略を取り入れられて、その国とのやりとりもできるようになる。(L)
・社会や文化や経済にいい点がたくさんある。新しいアイディアや習慣が入って来て、国際環境になる。(S)
・他の国に専門がいっぱいあり、意見の交換も必要だ。(I)
・少子化ためにたくさん年寄りがいるが、あまり子どもがいない。問題はその子どもが大人になったとき、その年寄りを支えられない。(C)
・受け入れないとほかの国との国際関係が悪くなるかもしれない。輸出入ができないと経済も悪くなると思う。(D)
・日本が日本の文化や日本芸術を共有することは必要だと思う。それで世界は日本を学んで、発展することが出来ると思う。(N)
・経済的に移民を受け入れるのは必要だと思う。そうしたら、国どうしの関係もよくなるだろう。(R)
・日本が高齢化、少子化社会になってきている。いろいろな仕事の働き手が足りない。例

えば、医者、看護師。ほかの国にその人が多くて、日本に来るのは市場の表現の一つだと思う。(C)
・今の世界はグローバル化の道に進んでいるから、日本だけではなく、他の国も移民を受け入れるべきだと思う。人はみな平等なので、住みたいところに住むのがいい。(M)
・人口減少による労働力不足、少子高齢化による年金などへの負担、国際競争力の三つの理由で、日本は移民を受け入れるべきだと思う。(C)
・人口と労働力人口が減る傾向に対処するために、他の国から来た労働力はもっともいい解決策だと思う。(R)

反対意見（留学生より）

・色々な国の文化や人々のことについて習えるが、日本ではあまりできないと思う。日本の生活は慣れにくいし、日本人が遠慮がちなので理解は難しいと思う。(B)
・フランスの事例のように移民はメリットもあるけど、犯罪などの問題が起きる可能性が高い。(P)
・移民は安くて能力のある人だから、日本人の仕事がなくなったり、文化的な違いで外国人の集団が出来てしまったりする。また、民族的均衡が崩れる恐れがある。(K)
・フランスの状況から考えたら、移民の人が多くなると、色々な大事な経済的な問題が起こる可能性があるといえる。(M)
・移民の人は仕事をみつけられないし、家もみつけられないから犯罪が増えるはずだ。今の日本では仕事がない状況で移民の人も仕事をみつけられない。(D)
・移民を受け入れて、日本人と外国人が結婚して、日系人になると、本来の日本人と日本人の文化がなくなるおそれがある。(T)
・日本は一つの国、一つの民族で、外国で暮らしにくいと思う。そして日本は言語的、文化的、人種的にも均質な国で、人種差別の問題がない。もしいっぱい移民を受け入れたら、この問題がおこるおそれがある。(I)

単語

育児施設、少子高齢化、少子化、政府、管理、政策、民族の均質性、賛成、反対、閉鎖的、歴史背景

表現

～の例を挙げて、説明したいと思います。
～（の）可能性がある。
～という点には賛成だが
たしかに～という点については賛成（認める）が
まず、第一に／　一つめに
～べき／～べきではない
確かに～ということはあるけれど／という意見もあると思いますが、
～と思う。例えば～では・・・
もし、～ということになったら

理由として、まず～
つまり
～だと思うかもしれませんが、・・・だと思います。
（賛成／反対）意見としては
〇つのポイントがあります。一つ目は・・・
そもそも
なぜかというと
また～という面もある
特に
以上の理由から～
～（の）おそれがある

コロケーション

失業率の高い
失業者が多い
労働の機会が与えられる
アイディアを取り入れる
視野が広がる／視野を広げる
技術が向上する
産業が活発になる

[日本は核を持つべきか]
（留学生の意見）
・国防のために核保持も必要だ、と考えていたが、軍拡競争になったら、平和を守る意識が迷走する。核を使わずに話し合いの力を使ったほうがいい。（E）
・核を持つことで国は守られるが、周りの人に被害を与える危険が高い。今、日本はアメリカに頼っている状態で、その保証がなくなる可能性があるので、核ではなく独自の武器を作ったほうがいいと思う。日本は他国にコントロールされないで、自分の立場を主張したらいい。（H）
・日本は唯一の被爆国なので、核保有したらそのイメージに対して過去の出来事が無視されてしまう。また、核を自分の国を守るためだけでなく、ほかのために使う可能性もある。地震が起きたときから、政府への信頼が薄くなってしまった。アメリカにも相談しなければならなくなり、日本が困るだろう。（R）
・もし世界の国々がまた新しい核弾頭を作ったら、軍拡競争になるおそれがある。さらに、核が実際に効果的かどうかを実験する必要がある。防衛するために核は必要ではない。（M）
（日本人学生の意見）
・賛成意見として、国を守るためだけに核を持つという意見があったが、軍拡競争になるだけではないだろうか。また、自分の国が核を持っていながらも、日本は核を持つべきで

はないという留学生が多かった。核保有国の国民の中には彼らのように核に反対している人は多いと思う。そういった人々が声を上げて反対することが世界平和につながるのではないか。私たちのグループの留学生が言ったように、核よりも言葉の方が力を持っていると思う。（H）

・日本が唯一の被爆国で、今も後遺症で苦しんでいる人がいる。将来のこどものことを考えると核を持たずに平和にいきたい。（H）

単語

唯一、被爆国、交渉する、軍事費、軍事力、実験、次世代、愛国心、危険、軍拡競争、脅威、おびやかす、抑止力、防衛、自衛隊、政府、用途、憲法、報道、保証、信用する、促進する、後遺症、放射線、放射能、被曝、原子力発電

表現

絶対～とは言い切れない
～派
～という意見もある

コロケーション

防衛手段を身に付ける
軍事力が弱い
経済力をつける
平和的に解決する
方法を見つける
競争力を高める
悪影響を及ぼす

資料４　「ダイエット関連商品PR」指導者からのコメント（ブログに掲載したもの）

一番「やせぶろ」

対話形式で消費者が疑問に思うところを答えていくという形式が良かったと思います。
Q＆Aはわかりやすいですね。体験者の声も効果がとてもよく強調されていました。
話し方、声の出し方、アイコンタクトの部分はやや評価は低めでした。

二番「まるっとシェイク」

留学生同士のスキットがよかったですね。役割分担がよくできていました。
シェイクの味やどこで買えるかなど、細かい質問にも配慮していました。
そのぶん、「売り」が少しあいまいになった感もなきにしもあらず。
全体的にまあまあという評価が多かったです。

三番「やせる烏龍茶」

スキット、よかったですね。途中から絡んでくるというパターンは、ほかにありませんでした。
どんな効果があるのかがよくわかりました。

最後の説明で、もう少し消費者への「まとめ」が欲しかった気がします。
どのくらい飲めばいいのか、「売り」の強調など。

四番「日替わりレインボーセット」

ＶＴＲというところが面白かったです。インタビューだけを取り出して「売り」を強調ですね。
説明役の二人のＱ＆Ａもとてもわかりやすかったです。
声もよく出ていましたが、メモを見ることが多かったのが残念。

五番「おきろ、ダイエットの時間だ」

スキットが大変面白かったという評価を得ています。「演技が良かった」の声高し。
確かに、面白かったのですが、商品の説明がもう一歩だったでしょうか。
簡単な三文ぐらいの短いキャッチコピーを作ると良かったかもしれませんね。

六番「すぐやせーる」

とても聞き取りやすい発表でした。
対話形式のＱ＆Ａの効果がよく出ていました。
発表メンバーが二人というのはこのグループだけでしたね。
全体的にすっきりとした印象があります。

Practice and the Subject of “Nihon-go Communication” Class

KAWANO Misako

Report on the activities of “Nihon-go communication” class which I have been in charge of from 2006.

In this class both overseas students and Native Japanese students are enrolled and we will practice communication through activities such as discussions, role playing, and presentations. The objective of those activities is to heightening students’ ability to express orally, however it is difficult to prepare objective basis for evaluation.